DANIEL OST
in IZUMO

出雲大社「平成の大遷宮」奉祝の花旅に密着しました。

ダニエル・オスト 出雲にいける

花・ダニエル・オスト　撮影・栗林成城　構成と文・近藤小桃
協力・出雲大社、出雲文化伝承館、出雲キルト美術館、神々の国しまね実行委員会
(財)フランダースセンター、ダニエルオスト事務局

6

7

8

9

10

出雲は、神と人と自然と物語が一つに溶け合った、
日本にとって特別な土地です。
出雲大社で、そして、この日本海を臨む山陰の地で、
日本の原点といえるものが、祈りとともに
長い年月にわたって完璧な状態に体現されていました。
この特別な伝統と風土に最大の敬意をこめて、
出雲の神々と豊かな自然に花を捧げたいと思います。

— ダニエル・オスト

1

2

3

4

5

60年ぶりの本殿遷座を終え、善男善女で連日にぎわう出雲大社（いずもおおやしろ）。神在月の10月18〜22日に「花の建築家」と称されるダニエル・オスト氏が「平成の大遷宮」を奉祝する花を捧げました。また出雲文化伝承館ではキルト作家八幡垣睦子さんと「出雲 奉祝の花・ダニエルオスト 八幡垣・織アート」展を開催。神々の物語と厳かな自然を深く理解し、温かい眼差しを注ぐ花旅に密着しました。

1・2／青苔や新藁など、出雲の自然からいただいた素材を彼はふんだんに作品に生かした。3・4／今回のために特別に各地から蘭や椿などの花も集められた。5／奉祝の花の細部に指示を出し続けるオスト氏。近寄りがたいほど。6／大修繕を終え、清新な姿となった出雲大社本殿。7・9／修繕を待つ社の檜皮もまた、苔むして美しい。堂々と大きい注連縄は2012年新しく奉製された。8／晴れ渡る稲佐の浜。神在月には八百万の神々をここで出迎える。10／北西からの寒風を防ぐ、この土地独特の美しい築地松。

黄金色に輝き揺れる稲穂の動きが、見る人を圧倒します。その中心には、「八雲立つ出雲」を象徴するように多彩な色を集めた野葡萄の実の瑞雲。オスト氏が「今回のベスト・ワンかな」と語る大作は、土台のスポンジをまるで動く波のように大胆にカットする匠の技から始まり、数日かけて稲穂と野葡萄で埋められ、豊穣の大地が完成しました。●イネ、ノブドウ

ただ祈りを竹に託して

八雲山、鶴山と亀山の緑に抱かれて建つ出雲大社本殿。「平成の大遷宮」により5年の歳月をかけて修造され、5月10日に「本殿遷座祭」が厳かに行われました。

本殿は70万枚もの新しい檜皮に葺き替えられ、頂には古来より伝わる「ちゃん塗り」された色鮮やかな鬼板や千木が。「この出雲大社の境内に立つと、視界のすべてが緑と茶の、樹木の色でしょう。これほど完璧に整った空間が他にあるだろうか。この場で、私に何ができるのか、と思うほどでした」と、オスト氏は初めて出雲大社に参詣した時の経験を率直に話しました。「平成の大遷宮」を奉祝する花をいけるという機会に巡り合ったのです。

その最初の衝撃の後、彼はどうしたのか…。京都の杉本家、仁和寺、金閣寺…と、高い評価を受けた花展の前もそうであったように、何度も出雲を訪問し、『古事記』英訳本を再び熟読したといいます。それほど日本の文化と美意識を深く理解して、花へ向かう姿勢と気迫を貫く花人がいるでしょうか。そして今、彼は「ここにはもう、新たな花も色も要らない。だから私は私の祈りだけを、出雲の

神迎えの道は稲佐の浜から神々が通る道。家々の清めの潮汲瓶(しおくみたが)には、いつも草花が。

1／ひっそりと建つ命主社(いのちぬしのやしろ)。弥生時代の銅戈と翡翠の勾玉が発見された。2／出雲は今も神秘の風土。太陽の周りに光輪ができ、太陽が3つに見える「幻日」と、虹が逆さになる「環天頂」という珍しい現象が重なり、オスト氏もスタッフも準備の手を止めてしばし空に見入った。3・5／厳かな松の参道、おみくじを結ぶ枝。緑がすべて濃い。4／「出雲大社に捧げた竹の先端に、ここ数日かまきりがいるよ」と彼が教えてくれた。

この竹は、オスト氏の祈りそのもの。まっすぐに伸びた竹をひたすら薄く削いでいくことで、柔らかくしなやかな素材に生まれ変わり、重なり合いながら天に立ち上ります。足元の苔は、出雲大社の裏を流れる清らかな川から。玉石は出雲の浜から。出雲の自然と神々に捧げる、静かな祈りの姿です。●タケ、コケ

今までに百以上の神社仏閣を訪ねてきましたが、出雲大社に初めて参詣した時に、私は鳥肌が立つのを覚えました。本殿をはじめ境内の社と、それを囲む緑の完璧な美しさは、長い年月を経ているのについ今生まれたばかりのようにみずみずしい。これ以上、私に何ができるのか、と思うほどでした。

— ダニエル・オスト

出雲大社

大国主大神（おおくにぬしのおおかみ＝だいこくさま）を主祭神とする。『古事記』の国譲りに創建神話があり、縁結びの神様として名高い。国宝である本殿は大社造とよばれる日本最古の神社建築様式。「平成の大遷宮」により、本殿をはじめ瑞垣内は厚さ1メートルもの檜皮葺の屋根を葺き替えて、2013年5月に遷座が行われた。ここでは「二礼四拍手一礼」と拝礼する。

住所／島根県出雲市大社町杵築東195
電話／0853・53・3100　参拝時間／境内は自由。参拝は6時〜20時を目安に。御守所及びご祈祷受付所は 8時30分〜16時30分
http://www.izumooyashiro.or.jp

薄緑色の竹に託して天に立ち上るようにいけたい」と、何度も竹の先端を見つめ、飽くなき調整を繰り返していました。

出雲のすばらしい贈り物

祈りが形となった竹の余韻を胸に、続いて出雲文化伝承館へ。「出雲奉祝の花・ダニエルオスト 八幡垣睦子・織アート」展の会場です。圧巻の30作。

「出雲の自然は満ち足りています。緑も花も、充分に人々の周りにあるのです。京都や東京などの大都市で展覧会を開くのとは違う。だから、この美しく素朴な自然から多くの恵みをいただき、それを私の花としたいという思いが、ごく自然にわきおこりました」というオスト氏。

とりわけ多くの人々を釘づけにしたのは、出雲大社本殿の天井絵「八雲之図」から飛び出したような、野葡萄の瑞雲の周りを、稲穂の実りが巡る円状の大作です。

古代の「豊葦原水穂国」という美しい名前を思い起こさせる稲穂の実りと、天空との境にたなびく瑞雲。彼の体内に、深い感動とともに吸収された出雲の美しいものが、時を経て、このように花の滴となって現れたのではないでしょうか。

訪れた人々の「出雲へのすばらしい贈り物をありがとう」という賛辞に、彼は「いえ、出雲から多くのものを与えられたのは私のほうです」と答えたのでした。

珊瑚水木を器にしたもう一つの作品です。腰掛待合から関戸を開けて別の露地へ進むと、直線の美しさを余すところなく見せた珊瑚水木と、ワイン色の蘭との組み合わせ。蘭はすべて小さな試験管の器に入っています。珊瑚水木の、曲線から直線への仕掛けが隣り合う二つの作品で展開。訪れた人を楽しませます。●コチョウラン、サンゴミズキ

純白の１輪は島根県の花、牡丹。季節外れの秋に、オスト氏のリクエストに応えて県内の大根島より届けられた特別な花です。錦木の枯れ色の茎を少しずつ矯めて、渋く、かつスタイリッシュな器に。明治期に建てられた、この地方独特の出雲屋敷の広縁に、ずっと前からそこにあるようなさりげなさで置かれていました。●ボタン、ニシキギ

青い稲藁が、意志を持っているかのように立っている作品。長年にわたって出雲大社の注連縄を奉製する人々と一緒に制作したそうです。「日本の藁を使った芸術に感銘を受けます。注連縄を代々奉納する人々との制作は光栄なことでした」とオスト氏は語ります。それは天に上る龍にも、祈る人の姿にも似て。最後の日に彼は牡丹２輪を新たに加えました。●イネ

生垣や庭木として愛好される貝塚伊吹は枝がくねり、葉が巻き上がるような勢いをもっています。その濃い緑の葉の１束１束を丁寧に挿して、長時間をかけてこのスペクタクルな大作が完成しました。土台となる苔むした古木も貝塚伊吹も、出雲産のもの。背景に揺れるのは、いにしえの布を現代に生かした八幡垣睦子さんの織のアートです。●カイツカイブキ

ンブレラのような、ユーモラスな作品
、大王松の美しい線を重ねて作られた
の。出雲屋敷の土間の空間に、楽しげ
鎮座していました。松の葉１本１本を、
たな素材として洗練させた、オスト氏
らではの作品です。●ダイオウショウ

実り豊かな出雲の山々の秋景色が、出雲屋敷の軒下にたわわにいけられていました。器はベルギー製の柔らかい色。柿の実や柘榴の実の素朴な姿と香りが大らかに、秋の温もりを伝えます。●カキ、ザクロ、ムベ、マユミほか

大王松の魅力をさらに飛躍させて、この床の間では逆さに用い、葉元のユニークな配色を際立たせています。二重に重ねることでドライになっても、美しい器として残ります。八幡垣さん制作の古布を使った菊の掛け軸と共に、深まる秋を感じさせて。●キク、ダイオウショウ

この作品はおそらく、竹の器が主役なのでは、と思うほど、まっすぐに伸びた大きな竹三本の潔い存在感が目を引きます。グロリオサをいけた器の口が障子の方を向いているので、花は竹の向こう側に控えめに浮かんでいるよう。花と器の粋な合わせ方です。●タケ、グロリオサ

出雲はそのままの自然が質実に守られ、
緑や花に満ち足りた幸いなる地です。
だからこそ、今そこにある自然の恵みが「花」になる。
出雲はもう一度私に原点に
立ち帰る喜びを与えてくれました。
「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」
といういにしえの言葉のように。

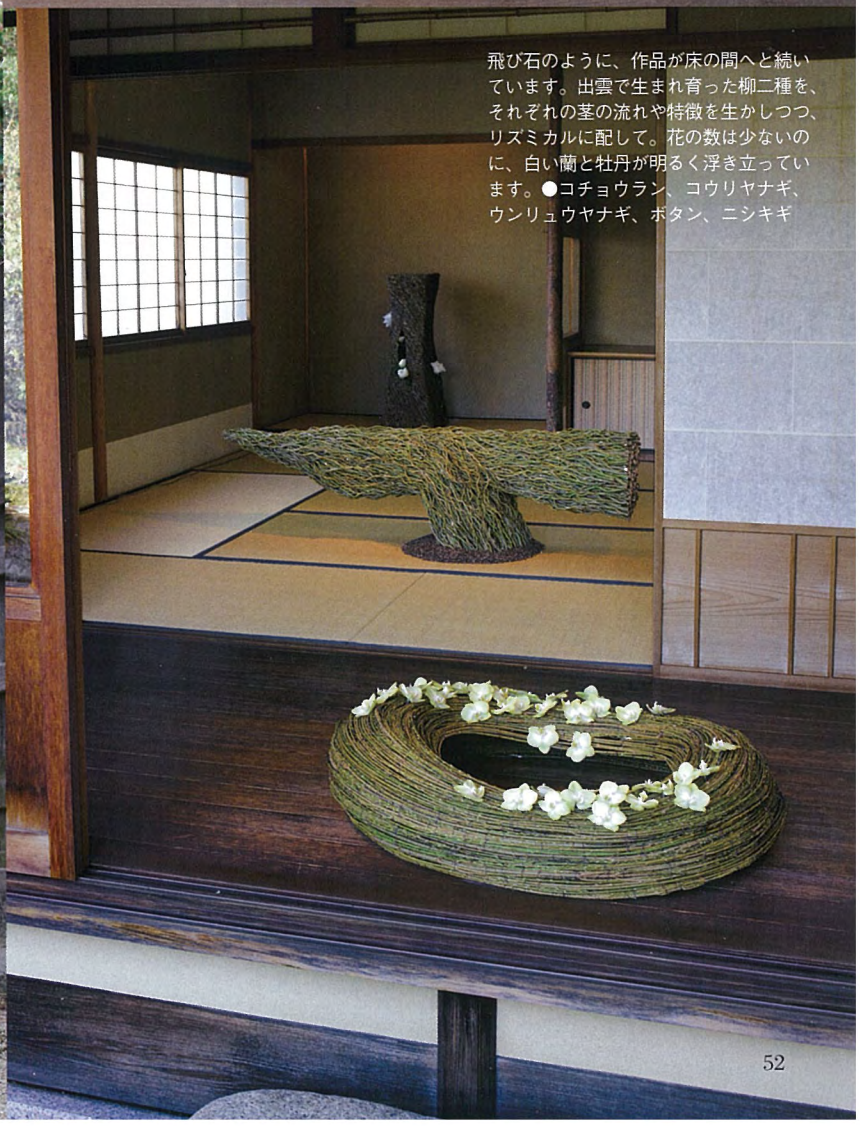
— ダニエル・オスト

代、日本の山々を空の上から眺
このように見えたのではないか
体はなだらかな起伏となって調
ら、一つ一つは濃い薄い、大き
と千差万別に盛り上がる苔の、
な緑の共演です。そして中心に
浮かぶ紅葉。その向こうには、
ぐ稲穂がたっぷりといけられて
●コケ、モミジ、イネ

静かな庭の一角。庭石に溶け込むように息づくのは、まっすぐな錦木を丁寧に矯めて流れるようなフォルムとなった、ユーモラスな作品。これはカタツムリでしょうか。覗き込むと、みずみずしく潤った苔から、純白のカラーがそれぞれに上を指しています。●カラー、コケ、ニシキギ

木目が美しい1本のまっすぐな柱もまた、出雲の自然からの贈り物であり、オスト氏の新たな世界です。上部には、薄く削られた木肌が幾重にも優雅な曲線を描いて、木という素材のもつ温もりと、香り高さをも感じさせます。たくさん挿した同系色の蘭は髪飾りにも見えて。●コチョウラン、スギ

鮮やかな緑と赤の色の対比が強いインパクトを与えます。オスト氏の展覧会の度に、この作品を待ちわびる方も少なくありません。規則正しく並ぶ黄金水木から、あふれ出る赤い実の量感。周囲の空気をがらりと変えています。●イタリアンベリー、オウゴンミズキ



飛び石のように、作品が床の間へと続いています。出雲で生まれ育った柳二種を、それぞれの茎の流れや特徴を生かしつつ、リズミカルに配して。花の数は少ないのに、白い蘭と牡丹が明るく浮き立っています。●コチョウラン、コウリヤナギ、ウンリュウヤナギ、ボタン、ニシキギ

ル・オスト

の世界的フラワーアーティスト。1955年生代のころよりベルギー、ヨーロッパをはじ花の世界大会でタイトルを受賞。ベルギーイヤルウエディングや世界各国の歴史的建台にした作品を発表。「花の建築家」「花のと称され、植物を素材とした彼独特の華麗デザイニングは、花のアートに新風を吹き日本の文化や自然に深い思い入れがあり、本家、仁和寺、東寺、金閣寺等で開催した界的にも高い評価を受けた。

1／神は細部に宿るというように、出雲大社の境内の周囲にも心安らぐ風景が広がって。2・3／杉玉のようなオスト氏の作品にも、竹を筏に組んで枯れ蓮や花を挿した器にも、細部にまで彼の美意識が宿る。

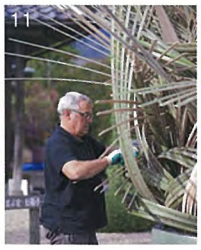
二〇一三年 神在月の花風土記

神在月の出雲に、この花展のためにベルギーやロシアなど世界各国から、オスト氏のスタッフが100名ほど集結しました。黙々と、徹夜も厭わず、彼が求める高度な要求に応える精鋭たちです。張りつめた緊張感のなか、完成まで丁寧な手仕事を積み重ねる姿勢が、心に残りました。

無事にオープンを迎えると、オスト氏も、彼と共に花と織の芸術を演出した八幡垣さんもにこやかな笑顔。ベルギー大使ご夫妻、出雲大社宮司千家ご夫妻、多くのゲストを迎えてレセプションが開かれ、花風土記はいっそう華やぎます。

「出雲は日本の原点といえるものが、長い年月にわたって完璧な状態に保たれています。自然が十分に満ち足りています。これ以上私に何ができるのか、と思うほどでしたが、この出雲の風土に直接向き合って花をいけながら、もう一度私も原点に立ち帰りたいという思いを強くしました」と、彼は改めて、感謝の思いを伝えていました。

4・5／野葡萄の実の色づきによって、細かく分類し、稲穂同様、ピンセットで付けていく作業風景。6／彼の作品は隠れた部分も完璧。7・9・10／秋の枯れ葉をひたすら重ねていく作業、杉の葉をまとめる人、コケを延々と植える人…、繊細な手の動きにみとれてしまう。8／3人がかりで秋の実りを仕上げる。11／出雲の竹で美しい曲線を描く大作は、大胆かつ緻密な作業が続く。



12／出雲の地酒の鏡割りで盛り上がった。「彼はもう一人のベルギー大使です、心強い」というベルギー大使の挨拶に多くの拍手が。むしろオスト氏は世界への日本大使かもしれない。13／千家宮司との歓談は尽きない。14／ドレスアップしたスタッフの髪飾り。さすが！15／長女ニーラさんもかけつけて彼をサポート。

出雲キルト美術館

江戸期など古い時代の着物の布地に、織り、染め、刺繍などの手仕事を融合させた八幡垣睦子さんの作品を展示する。

住所／島根県出雲市斐川町福富330　電話／0853・72・7146　開館時間／10時～17時　休日／毎週水曜、第三日曜

入館料／大人500円、高校生以下300円

http://www.yawatagaki.com

出雲文化伝承館

明治29年に建てられた旧江角邸を中心に、不昧公ゆかりの独楽庵、出雲流庭園など、出雲の文化と伝統を伝える。

住所／島根県出雲市浜町520　電話／0853・21・2460　開館時間／9時～17時

休日／月曜（祝日の場合は開館）

入館料／無料（特別展は観覧料が必要）

http://www.city.izumo.shimane.jp